

新任教員紹介 (Introduction of New Faculty Members)

「新任のご挨拶」

関西学院大学総合政策学部 助教 今西 祐介

私は、2007年に本学部を卒業しました（＝総政9期生）。本学部を卒業後、大阪大学文学研究科に進み、2009年9月から2014年3月まで、フルブライト奨学生として米国マサチューセッツ工科大学（MIT）言語・哲学科博士課程に留学していました（2014年9月にMITより博士号を取得）。私の専門は言語学の中でも理論言語学と呼ばれる分野なのですが、なぜ総政からそのようなマイナーな（？）分野に足を踏み入れることになったのかと聞かれることがあります。以下では、私の研究の紹介と併せてその経緯を簡単に述べたいと思います。

ヒトをヒトたらしめている特質の一つに言語があります。世界には少なくとも約6000の言語があると言われており、これらは音声的にも形式的にも非常に異なる側面を持ちます。しかし、抽象的なレベルで考察してみると普遍的な規則・原理に基づいて成り立っていることが分かります。私は、生成文法という言語の数理モデルの構築を目指す理論に基づき、人間言語の普遍的側面（＝普遍文法）を解明しようと努めています。普遍文法を解明することにより、子供の言語獲得や言語の起源といった認知科学の積年の問題に対しても有力な解答を与えることができると期待されています。私は、学部時代に生成文法の講義を受けたのがきっかけで、言語の持つ規則性の美しさに魅せられこの学問にのめり込みました。

これまで私は、実証研究の一環として、フィールドワークを用いた消滅危機言語の研究に取り組んできました。多くの研究者が警鐘を鳴らしているように、今世紀の終わりまでに現存する言語の約半分が消滅してしまうと言われています。私はこれまでに中米・グアテマラにおいてフィールドワークをおこない、消滅危機言語であるカクチケル語（マヤ語族）の研究をおこなってきました。研究を進めるうちに、類縁関係のない日本語や印欧語と同じ特性がカクチケル語にも存在することを明らかにしてきました。このように理論言語学というレンズを通して言語を分析していくことで、表層上は非常に異なる言語の間に驚くべき類似性が存在することを明らかにするのはこの研究の醍醐味だと感じています。最近では、奄美群島の喜界島で話されている喜界語の研究も開始しました。2009年に、喜界語を含む6つの琉球諸語がユネスコの消滅危機言語地図に追加されました。

これまでの研究に加え、今後は理論研究の言語政策への応用可能性についても研究していきたいと考えています。ユネスコは1990年代に始まった消滅危機言語地図プロジェクトの中で「言語」はリストに載せているのに対し、「方言」は原則として載せていません。言語研究の成果はこのような“政策”決定プロセスの中で重要な役割を果たします。例えば、琉球諸語は日本国内の国語学者の間では日本語方言と分類されていましたが、これは1879年の琉球処分以降の国家のイデオロギー政策に依るところが大きいと言われています。一方、言語学的観点からみると、琉球諸語は日本語とは大きく異なる言語体系を持っており、類型論的にも別の言語だと主張されてきました。もし言語学の客観的な研究成果がなければ、琉球諸語がユネスコの議論に上がることはなかったかもしれません。こうした専門的知見と政策の繋がりを意識した研究も行っていきたいと考えています。思い返せば、これは10年前に私が本学部で学んだ「総政的」視点なのかもしれません。この視点を少しでも学生に伝えていけるように尽力したいと考えています。研究者・教員としてまだまだ未熟ではございますが、ご指導ご鞭撻の程宜しくお願い申し上げます。